



わかひさ便り 4

2015. 9. 14

わかひさ保育園 園長 井上國康

先日、他園の方々と三陸地方の保育園を訪問させて頂きました。今回はその報告です。岩手県は本州で一番広い県（四国4県にほぼ同じ）です。花巻から民話の古里遠野を経て三陸へ、途中工事のダンプカーが頻繁に往来していましたが、地元の方の話では、政府は「フォーマスばかりで何もしない、震災の復興は全く進んでないと嘆いておられました。これを書いている間にまた先週東日本に豪雨災害、その惨状は津波を思い出させます。

明治29年6月三陸津波で2万2千人が亡くなったことが柳田國男の遠野物語にあります。宮沢賢治が岩手地方の冷害について書いていますがこの地方は昔から飢饉が多く、それを今回の震災でも乗り越えてきた知恵、工夫、互助の精神は一見「安全な暮らし」に見える我々も見習うべきだと思います。



3階途中まで津波が襲った廃屋がぽつんと残っていた。このすぐ横にわかき保育園（全壊）があった。いま高台に移転し日台きずな保育園になっている。

被災地の小学校は今不登校の子供が一割に達するそうです。震災で家族や友人、住む家、地域、職場を失い毎日の生活に懸命な被災地の人々の様子が伺えます。大槌町では1285人（新聞発表）が犠牲になり行方不明はその3分の1の425人、遺体の損傷が激しく身元確認も出来ない方々が多数おられます。



左奥が日台きずな保育園（山田町）で国からの援助はなく台湾赤十字社からの義援金100%で高台に再建された。震災前定員60名を現在30名に変更、だが園児は戻らず今18名が通う。

以上児さんがよさこいソーラン節で歓迎してくれた。

2万人に迫る犠牲者を出した今回の東日本大震災で特筆すべきことは、岩手だけでなく宮城、福島三県の認可保育園で園舎は津波で壊滅したものの保育中の園児は一人も亡くなっていないということです。津波が迫る中、裏の山道への必死の避難誘導、寒さに震え僅かな食料で餓えを凌ぎ2日後に救助された保育園児・職員もいました。しかし

当日引き渡した子どもが保護者とも何人も津波で亡くなり（大槌保育園、堤乳児保育園）今後の安全対策に課題は突きつけられているとのことでした。

家

族を亡くされた職員、仮設住宅から通勤の保育士も多く、住宅やインフラの整備が遅れ被災地を離れて暮らす人、津波の不安から内陸部、県外に居住を移し、職を得てそこでの定着をする人が増え、将来園児が戻ってこない不安とともに「被災地のことを忘れられることが我々が一番怖い」と話されていました。

「災害は忘れた頃にやってくる」(地震学者：寺田寅彦) そうですから、**被災地の人々のことを忘れないでいることは、自分と家族の安全を守る意識を常に持つことにも繋がると**思います。



JR 山田線・吉里吉里駅、あの日以来使われず赤く錆びたレールだけが残っていた。JR 東北は復旧を断念しているが鉄路の再開を地元は熱望している。



大槌保育園は一階の天井まで水没、保育士、園児は 30 度急斜面の裏山に駆け上り避難して無事だったが引き渡した園児 9 名が死亡。堤防で津波の勢いは弱まり園舎の倒壊は免れた。



堤乳児保育園は高台にあったため津波から危うく免れた後大勢の被災者が身を寄せ翌日から避難の拠点として重要な役割を担った。ここでも降園後 4 組の親子が亡くなった。

堤乳児園から大槌町の復興工事を臨む。三陸地方は山が海に沈降した地形（リアス式）で、津波被害が拡大しやすく、平野は少ない。津波のあと居住出来ない平野が残った。



近くのお寺での 1 年半の仮園舎生活の後、高台で再建された吉里吉里保育園（大槌町）、右は保育園下に建てられた復興住宅第一号棟